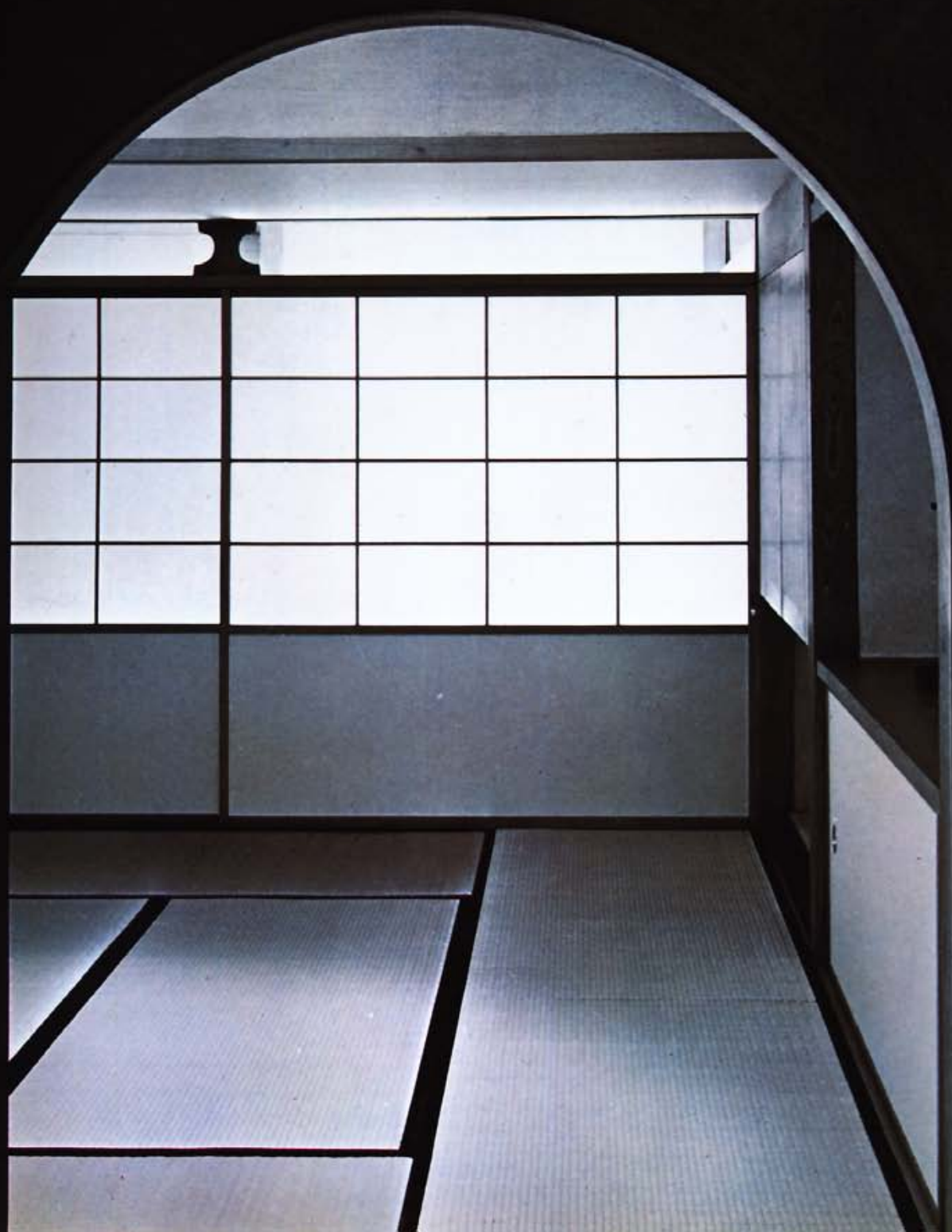


# 木造の詳細

住宅設計編



一軒の家が完成するまでの全図面を取録することは、設計者にとっても初心者に対しても、貴重な記録となるであろう。

住宅にかぎらず、平面図が設計における決定的要素をもっていることは明らかである。平面が決まり、立面を考え、展開、矩計、そして詳細に入って、もう一度一般図がチェックされる。

設計図面は、「デザインのどよう見せるか」を確認すると同時に、「どう作るか」という生産のための伝達手段である。克明に描かれた図面は作者の意図を施工者に伝える。木造の場合は、職人の腕に依存するケースが多い。精緻な図面は作者の意図を職人に伝えるためである。1/50の図面は外形を表わすものであり、1/20の図面は実際の空間に近いスケールがつかめる。しかし、施工者には作者の微妙な真意は伝わらない。それは現寸図によって果たされる。

ここに取りあげた呉羽の舎は、富山市近郊、呉羽山の丘陵地帯の広い敷地に門屋、主屋、書屋(離れ)の三棟からなっている。すでに、この住宅については建築雑誌に紹介され、読者の多くは知己の家であろう。深い軒、太い柱、基礎回りの石張り、敷瓦の床、それらは作者の個性を表現したものであり、その的確な図面は、設計図として、ひとつの規範となりうるものであろう。

一人の作家の、ただ一軒の家だけで一書を編んだ例は少ない。したがって、図面構成、表現、詳細についての解説は普遍的なものとし、そのうえで、この住宅についても触れることにした。ひとつの設計図ができあがるまでには幾多の変遷があろう。この住宅にも変更図は各所にある。そのプロセスを出すことも、ひとつの設計例であるが今回は変更後の正しいものだけを掲載し、写真と合わせて理解しやすいように編集した。写真は竣工時に村井修氏が撮影したものと、今回、ディテールをテーマに本書のために撮影したものとである。したがって、ディテール写真は数年を経過した現状の写真である。

先に「木造の詳細」1、2で“構造”と“仕上げ”についての基本的な解説書を編集したが、本書はその続編として、住宅設計編とし、その応用編に該当するものである。建築科学生のための教科書に、建築の実務に携わる人びとの資料となれば幸いである。

本書の編集に当っては、先の「木造の詳細」の執筆者に協力をもとめ、企画の方針の決定の一助とした。また、当時の図面の作成者、大村健策氏には変更図の指示、詳細図についてのご協力をいただいた。

なお、この原図面は寸法法で描かれていたものを、メートル法に換算したものであることを付記しておく。

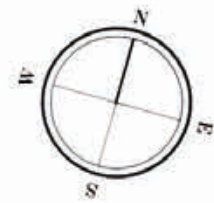
1969年11月 編集部

4	まえがき
6	図面構成—住宅の設計図
10	配置図
■	主屋
12	平面図
14	立面図
18	展開図
31	天井伏
32	基礎伏
33	床伏図
35	小屋伏図
36	軸組図
43	断面矩計
62	電気設備図
63	給排水図
64	図面の表現
68	納まりの効果
■	詳細
71	老人室東面小窓
72	居間開口部
73	玄関入口
74	客室・寝室開口部
76	玄関脇便所窓格子
77	軒先詳細
78	南面がらり
80	建具(ガラス・紙障子)
86	照明器具
92	家具
94	厨房
96	石張り詳細
■	書屋
105	平面図
106	立面図
108	玄関回り詳細
110	断面矩計
112	西側平面詳細
114	展開図
117	天井伏・小屋伏
118	便所・手洗回り詳細
120	部分詳細図
■	門屋
126	立面図
127	小屋伏図
128	平面詳細
131	天井伏図
132	詳細図
134	呉羽の舎について





- |     |   |   |               |
|-----|---|---|---------------|
| 1.  | 床 | 手 | 北木筒花崗 420-450 |
| 2.  | 衣 | 関 | 店細粒甲板敷        |
| 3.  | 広 | 間 | 畳敷            |
| 4.  | 踏 | 込 | 畳敷            |
| 5.  | 老 | 人 | 居             |
| 6.  | ・ | ・ | ・             |
| 7.  | 居 | 間 | 畳 7帖          |
| 8.  | 客 | 室 | 畳 4.5帖        |
| 9.  | 寢 | 室 | 畳 7帖          |
| 10. | 主 | 婦 | 室             |
| 11. | 登 | 廊 | 下             |
| 12. | 脱 | 衣 | 洗面            |
| 13. | 浴 | 室 | 花崗石石磨き        |
| 14. | 手 | 洗 | 所             |
| 15. | 特 | 手 | 口             |
| 16. | 厨 | 房 | ・             |
| 17. | 子 | 供 | 室             |
| 18. | 客 | 用 | 手             |
|     |   |   |               |
| a.  | 床 | の | 間             |
| b.  | 化 | 粧 | 地             |
| c.  | 化 | 粧 | 吊             |
| d.  | 大 | 走 | り             |
| e.  | 小 | 庭 |               |
| f.  | 後 | 庭 |               |
| g.  | サ | ー | ビ             |
| h.  | 広 | 境 |               |
- 止、畳は手間は厚10mm、ローファイアおよびフェルト厚8mm、下敷とする  
畳は備後表1級品、相高宮付、厚60mm  
同中特記以外の柱は120×120とする

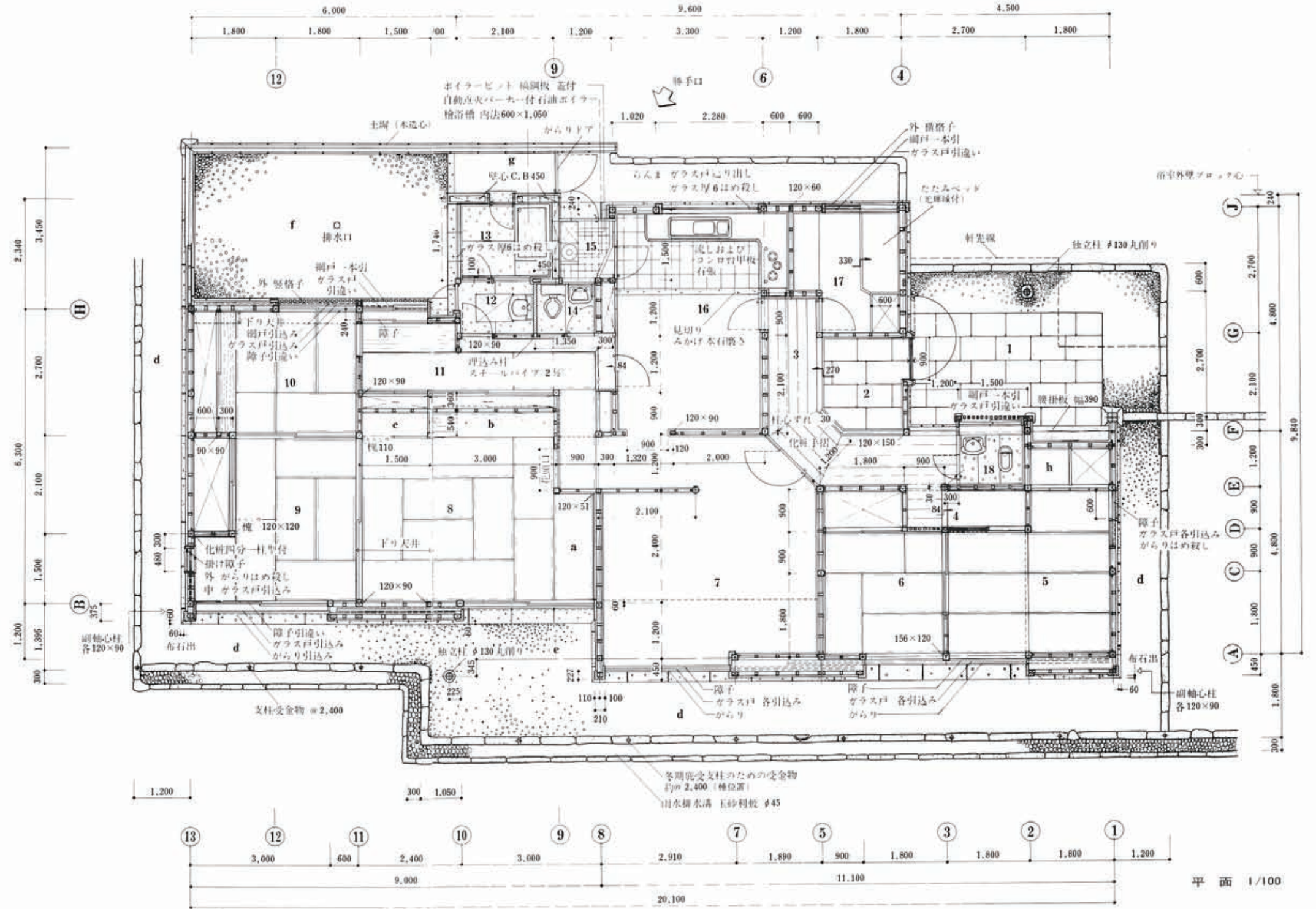


平面図

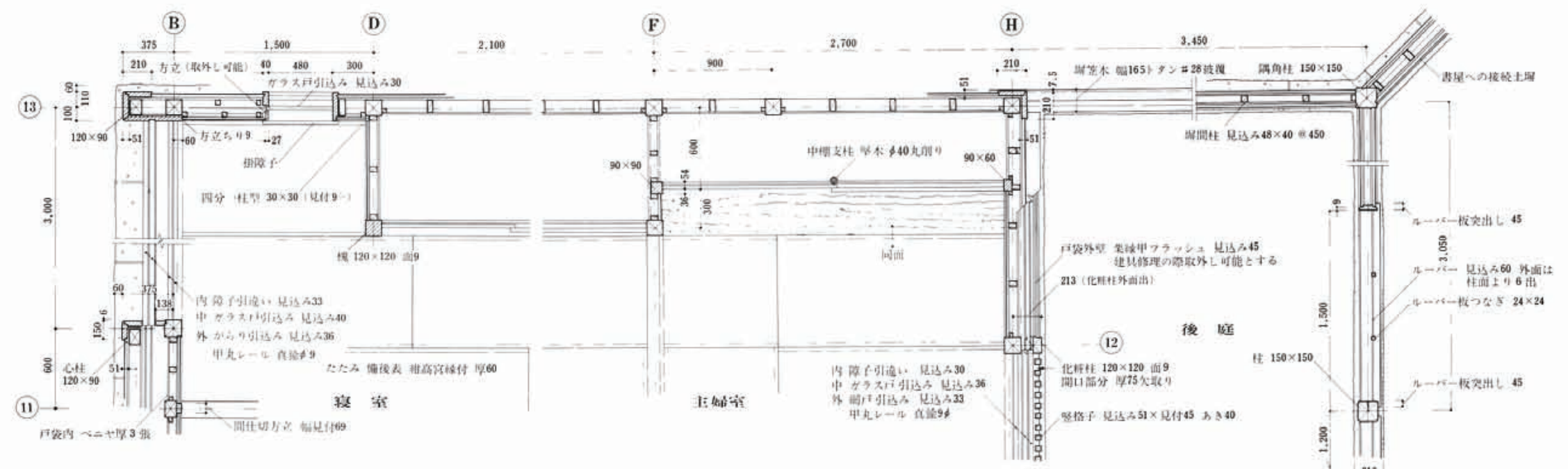
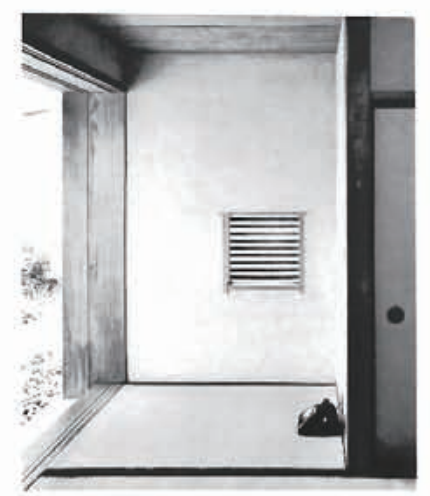
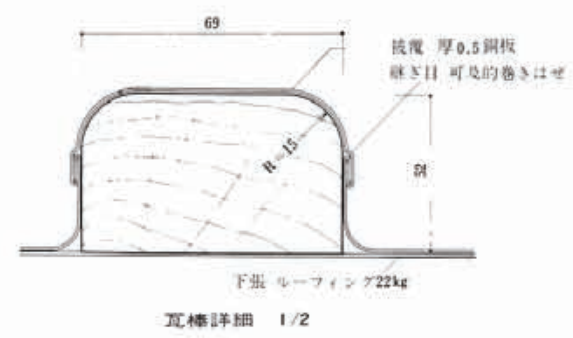
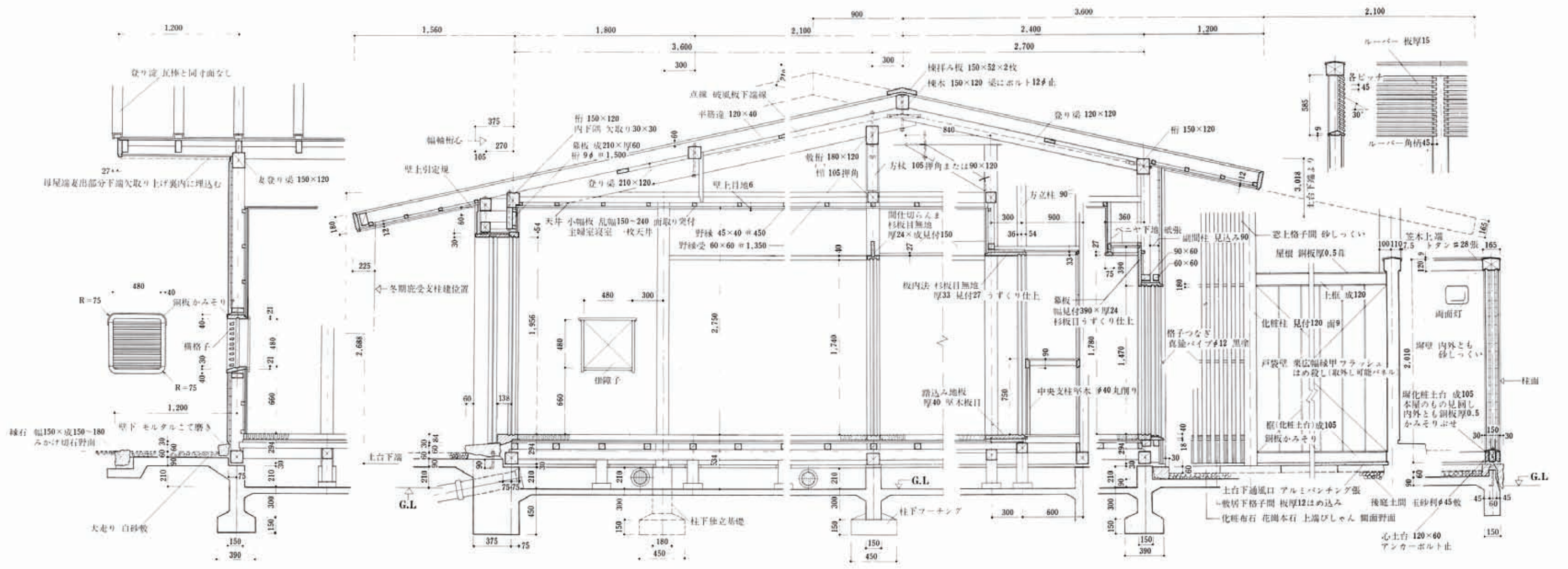
住宅の設計図では最も重要な図面である。俗に間取り図というものは、住宅を部屋という空間(面)の集合と考えた場合、その結合のシステムを表現するものと現在は考えてよい。柱、柱によって間をとっていく平面構成上の表現は、構造図(床伏)によることとすれば、各室内空間の内法線を連続して書きあげる。すなわち壁および建具面で切った水平断面図としての機能がまず要求されるだけとなる。しかしこのように壁面線(外壁を含めて)を強調したところで、住宅

の空間は断面図上の姿図である床の状況にまず支配されるわけで、通常床面の仕上げ、高低などが詳細に記入され、床面の使用を助ける各種装置とくに建具が記入される。かくして空間構成のシステム図としての機能は回復されるが、本来からいえば、これは平面図だけに限られているわけではない。ただし、床置の家具や設備装置のレイアウトを指定して、設計の意図を表現しやすくするのは平面図ならではの特権である。平面図はややもすれば詳細にわたるが、これ

はとくに1/50程度の縮尺で、主たる構造材と仕上げ材の区別、下地の種類、建具の見出し図、床仕上げの割付図、開口部の詳細などをかき入れることができるから、図面構成上では当然これらは分離すべきものである。しかし設計内容の表現として、なにか一目みればその概略をうかがえる図面としては平面図が最適である以上、ある程度までの重複した書込みや補足は、平面図には要求されてしかるべきものと考えられている。(太田邦夫)

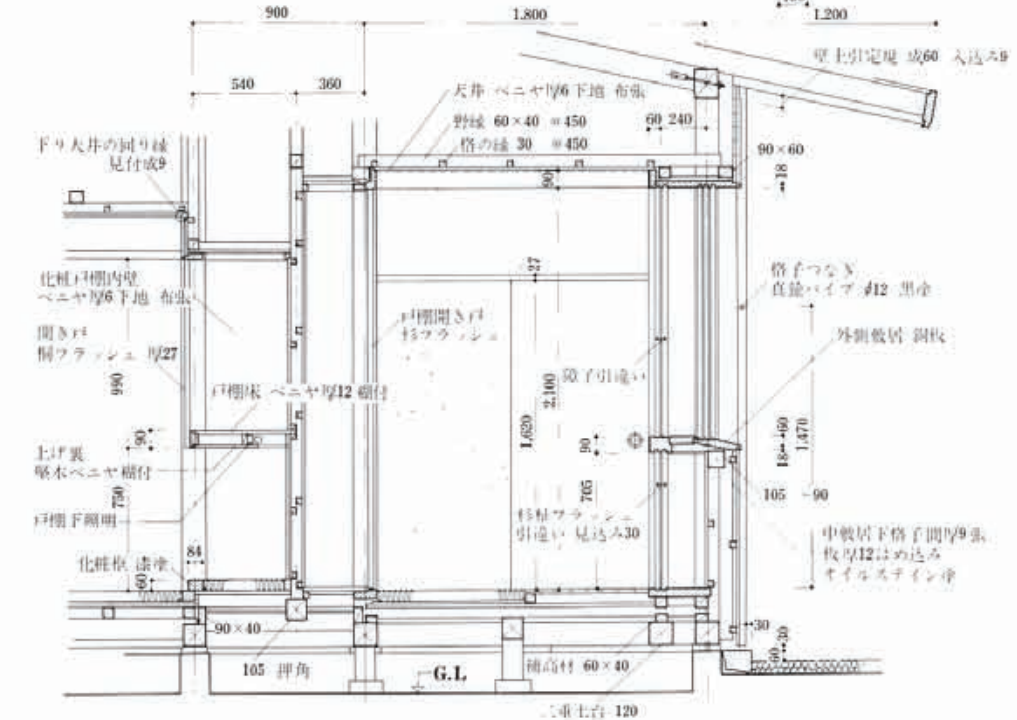
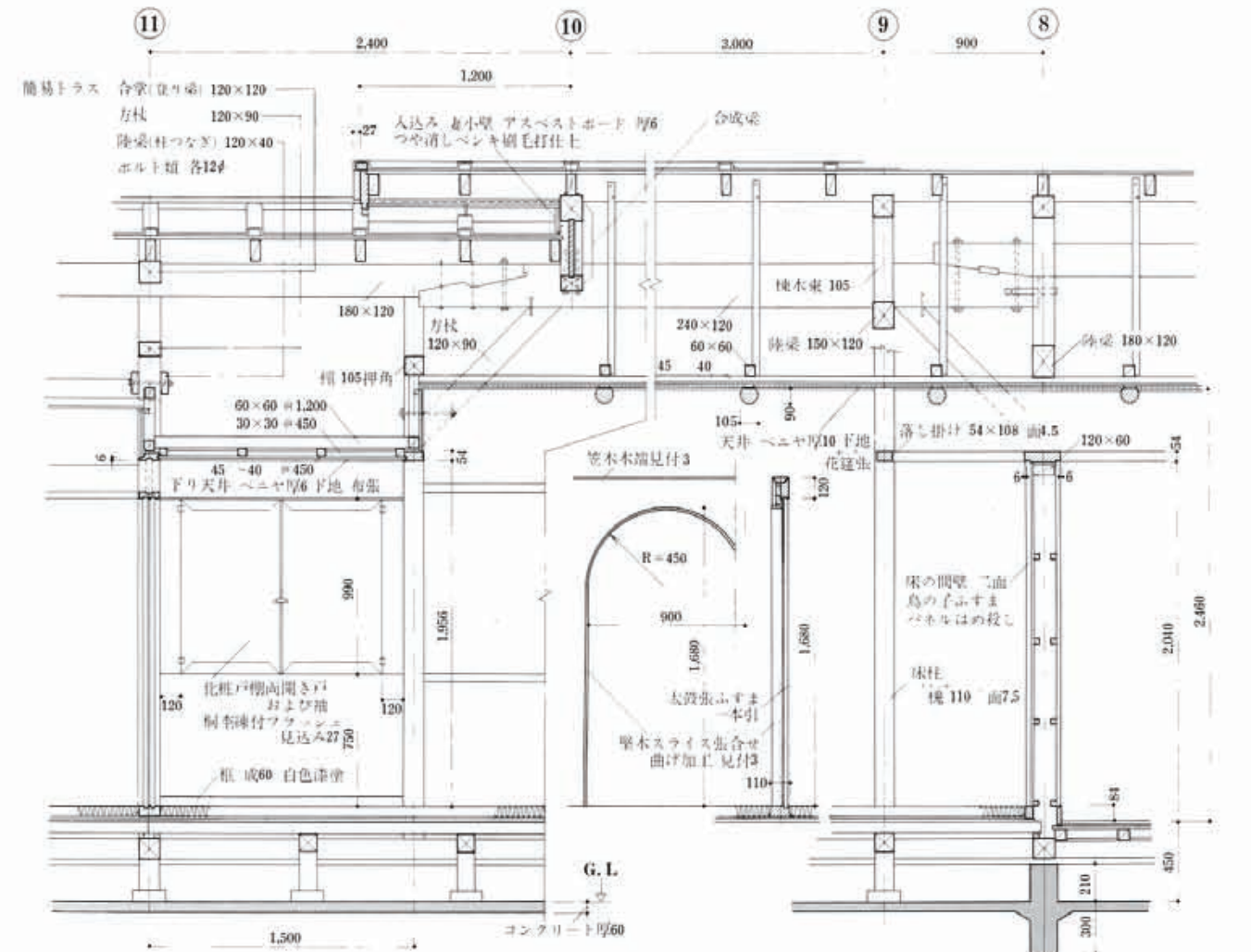
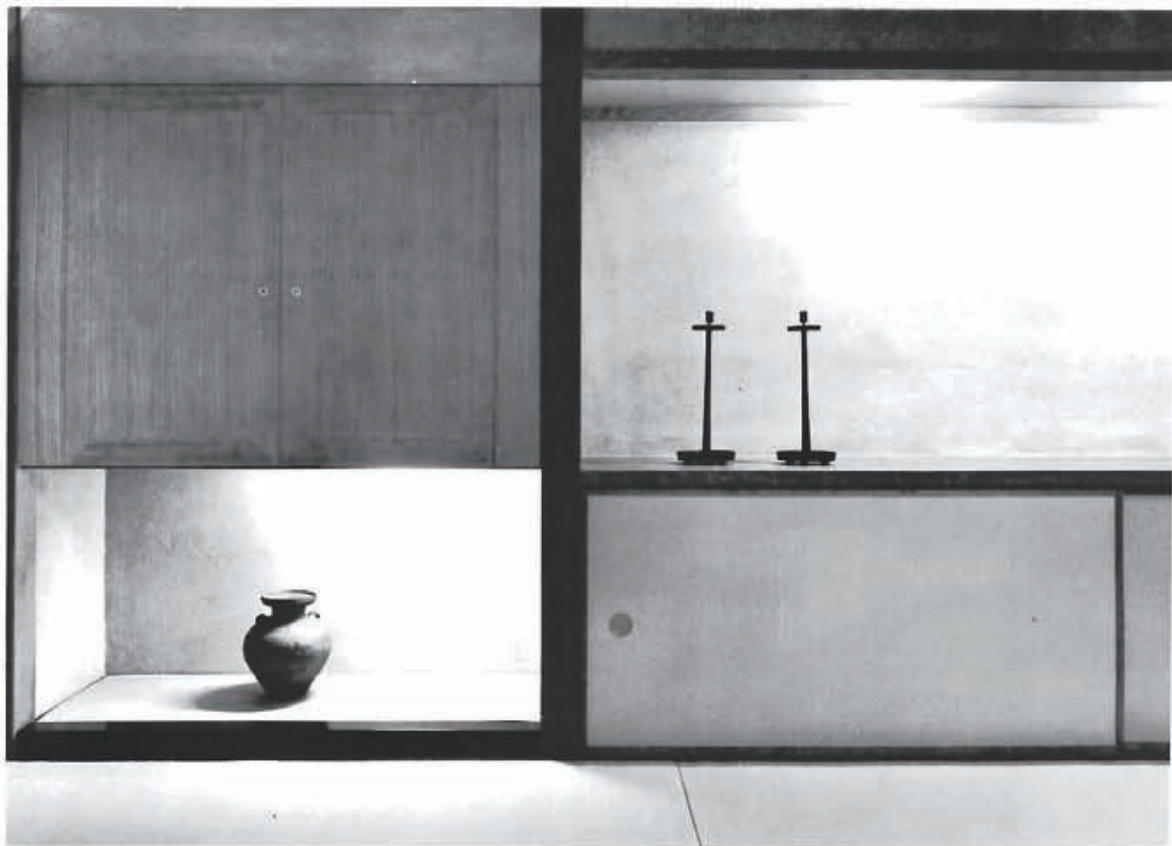
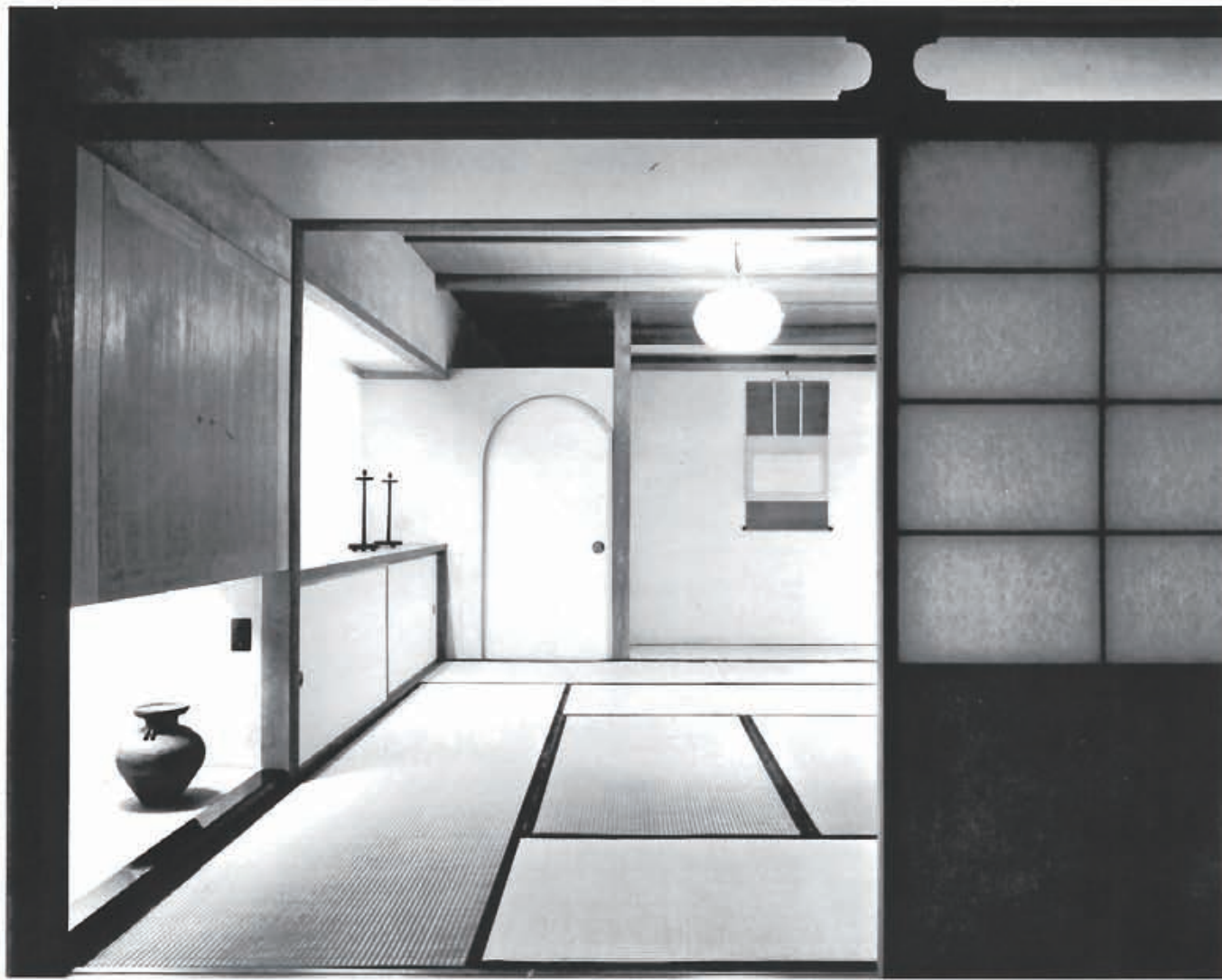




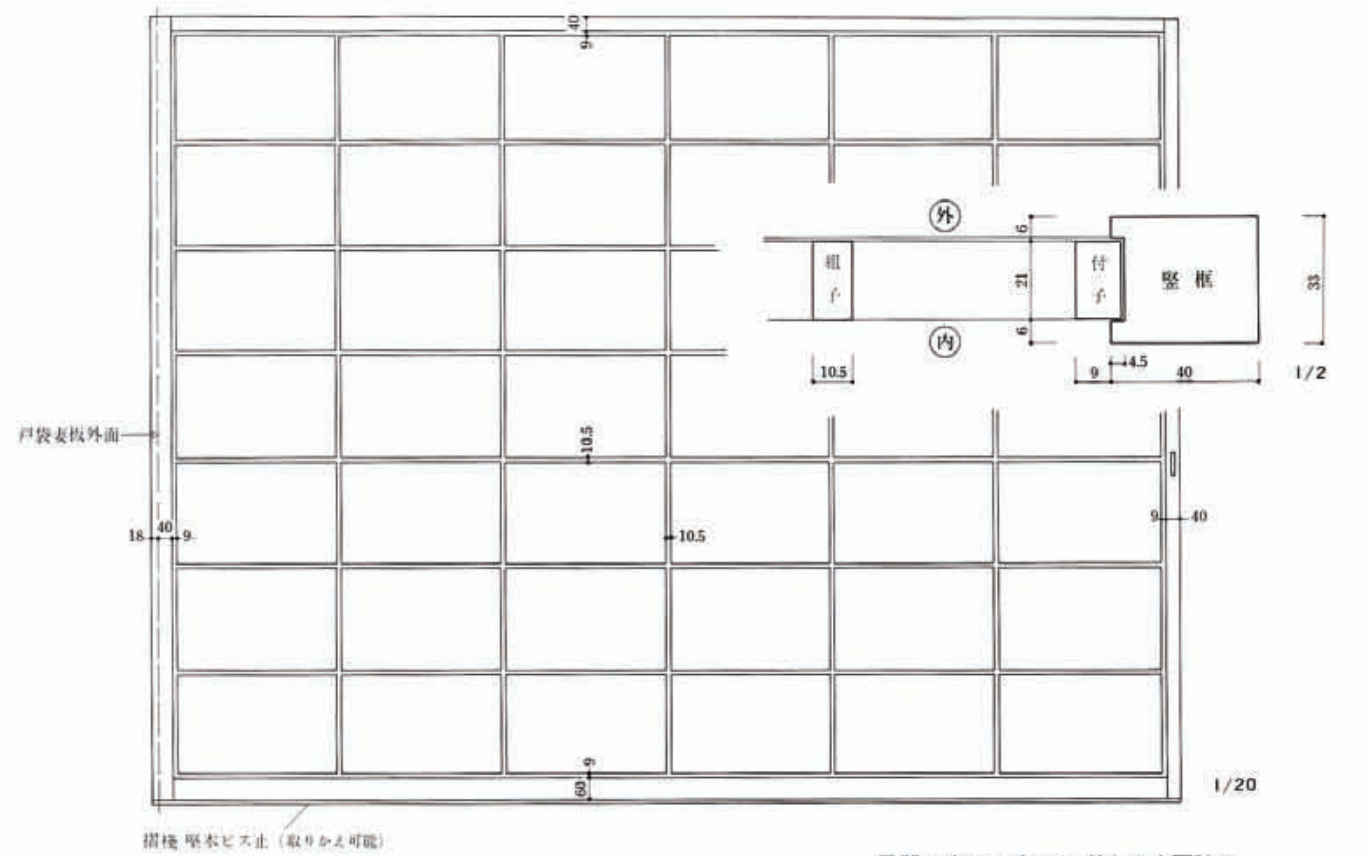
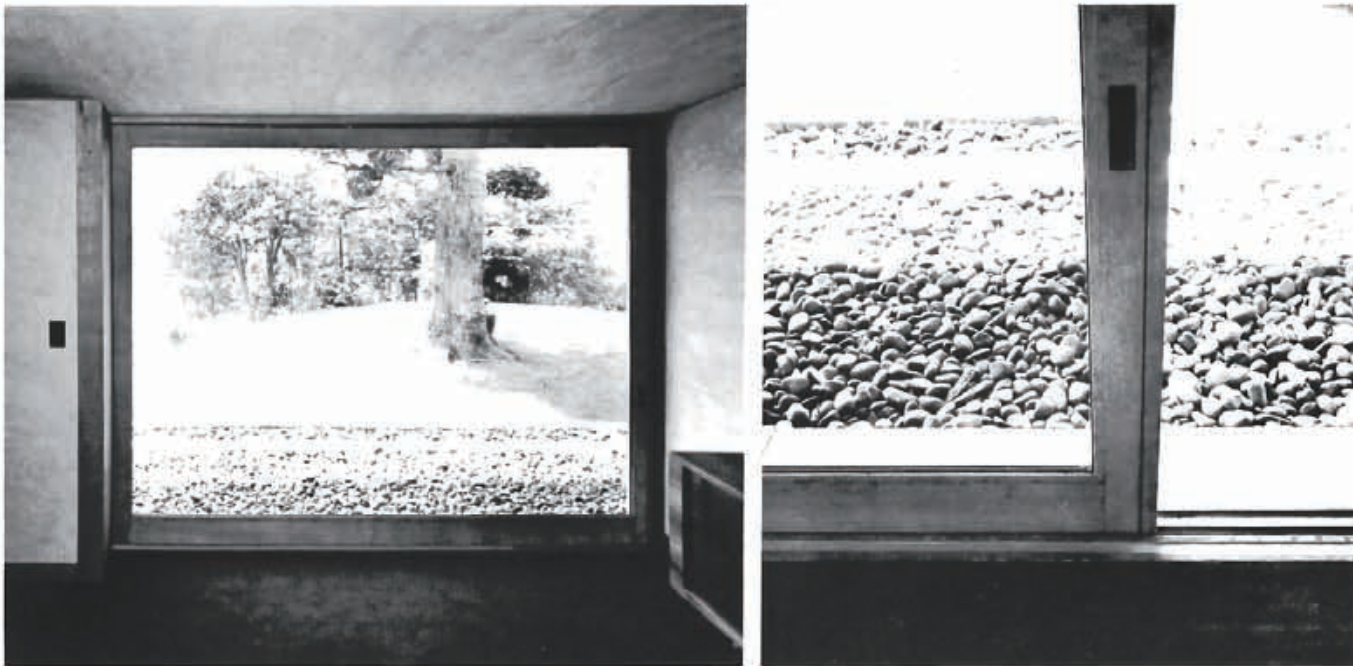
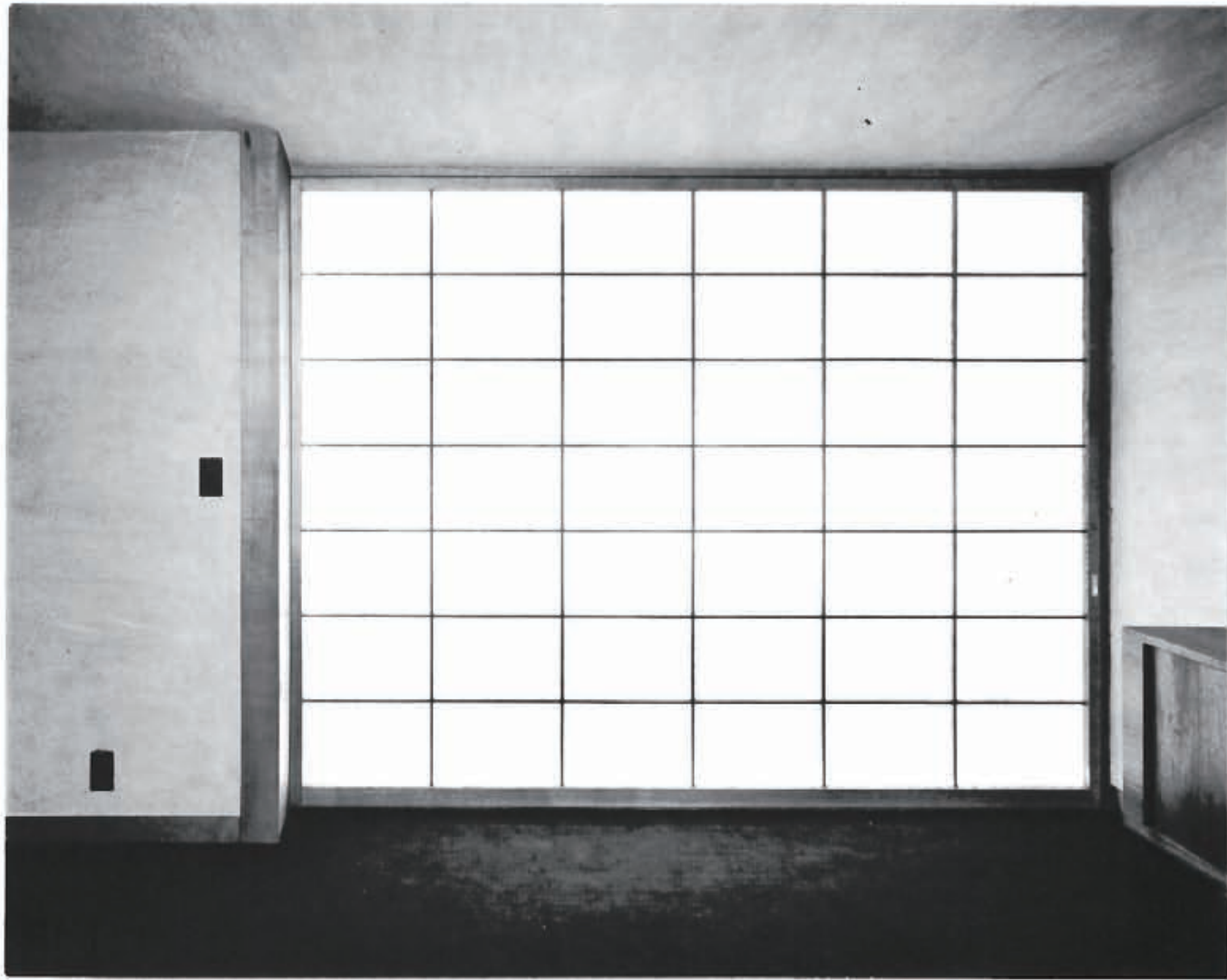


寝室・主婦室平面設計詳細 1/40

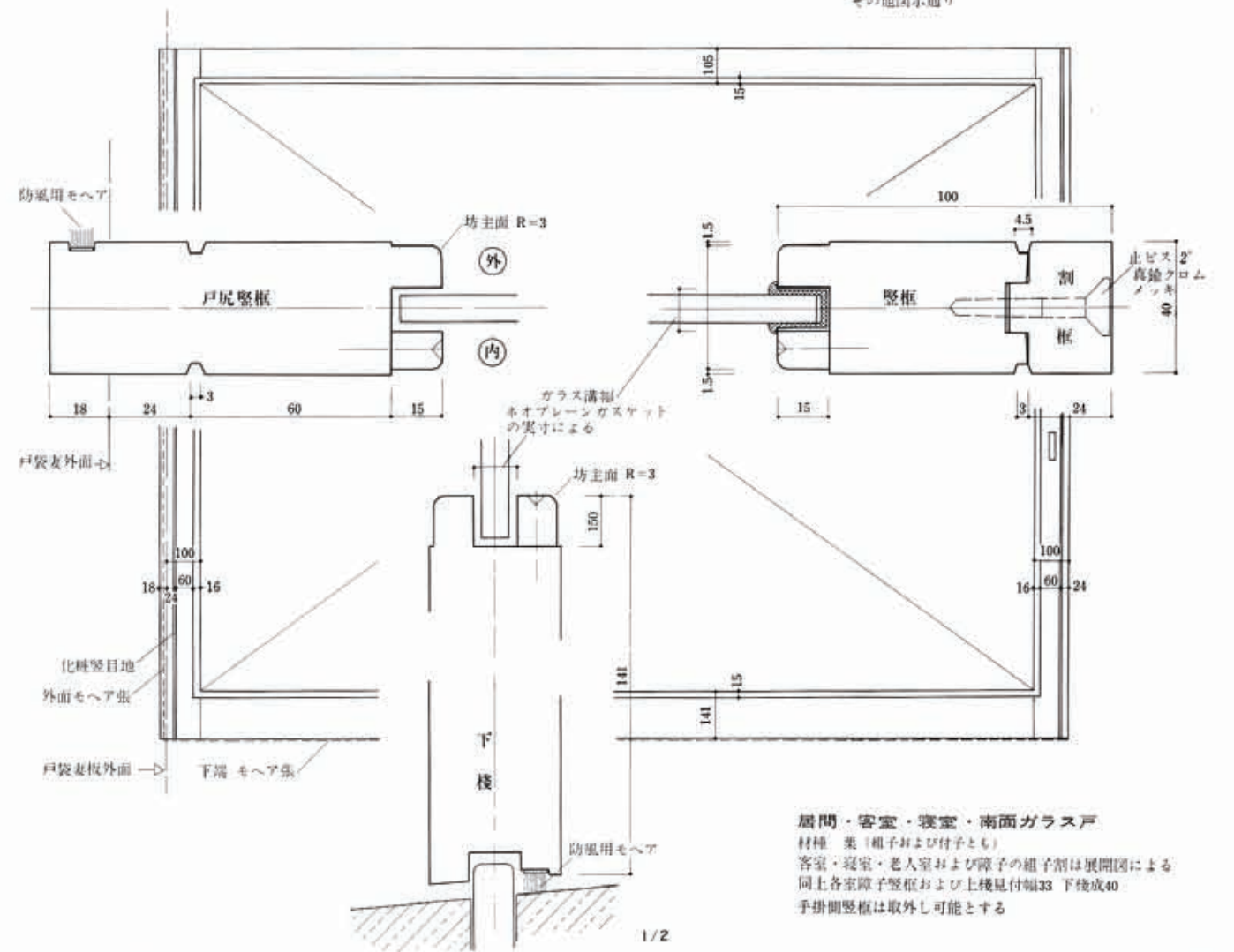








居間・客室・寝室・老人室南面障子  
 材種 栗 ガラス 厚8 磨きグレーペン  
 注 老人室ガラス戸の縦框見付幅84 割縁および壁目地なし  
 その他図示通り



居間・客室・寝室・南面ガラス戸  
 材種 栗 (組子および付子とも)  
 客室・寝室・老人室および障子の組子割は展開図による  
 同上各室障子縦框および上横見付幅33 下横成40  
 手掛側縦框は取外し可能とする





断面図

建築をある面で切断して、その最も重要な空間の断面の構成を表現しようとする点で、平面図の意図とさして相違はない。ただし、製図者にとっての重要な空間を通る切断面がどこなのかを、より一般的な平面図で明示しておかないと、その意図がたつたわりにくい。木造住宅にあっては、屋根の勾配、高さの押しえかた（とくに棟や軒）、床の高さなど、設計上の重要なポイントが表現される図面である。

